〔宗五大草紙下〕からかさの事

一かさの役人、墨がさは小者の役、公方樣其外公家、門跡、禪僧、武家同前、略○中又雨がさは公方樣御參內、八幡御社參以下きとしたる時は、ほういの役人さし被申候、私にては中間さし候、又かさもあつかひ候事は、中間の役ニ而候、人にかすも、餘所よりかるも、中間取次候べし、

〔貞順故實聞書條々〕一笠をさし候役は、沓より猶下り候、公方の御笠をさし候は、悴者にて候、

〔松田貞秀記〕一同年○永和元年四月廿五日、御參內始、略○中御傘役事、兼日無御用意、仍時而被仰付、千秋右近將監勤仕、著直垂、先在其例、

〔薩戒記部類二〕侍不審條々

一御笠は諸大夫差之

〔享保集成絲綸錄十六〕享保三戊年四月

下馬ゟ下乘橋迄召列人數之覺

一四品及拾万石以上、幷國持之嫡子侍六人、草履取一人、挾箱持貳人、六尺四人、雨天之節は笠持一人、

一一万石以上、略○中雨天之節は笠持一人、

下乘ゟ內江召列人數之覺略○中

一一万石已上嫡子、略○中雨天之節は笠持一人、

一諸番頭、諸物頭、布衣以上之御役人幷中奥御小姓衆、三千石以上之寄合、略○中雨天之節は笠持一人、

一三千石以下之寄合、布衣以下御役人、中奥御番衆、總御番衆、略○中雨天之節は笠持一人、

一醫師略○中雨天之節は笠持一人、略○中